

持続可能な未来と宗教

加藤尚武

※本稿は2016年11月17日、東京・新宿区のTKP市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた講演をまとめたものです。

1 地球の持続可能性を脅かすもの

地球の「持続可能な未来」が脅かされている——といつても、地球そのものがなくなってしまうという話ではありません。小惑星か何かがあつて地球が消滅してしまうとか、そういう「外からの脅威」ではなく、

もっと別のものが、地球の持続可能性を脅かしているわけです。それは何でしょうか。

資源枯渇・生物種減少・環境汚染

第一に、資源の枯渇です。資源には、非循環型資源と循環型資源の二種類あります。石油や石炭は非循環型資源であり、一度使ってしまうと、二度と元に戻せません。私たちはいま、恐ろしいほど膨大な量のエネルギー資源を消費しているわけですが、これらの資源がなくなってしまうえば、電気をつけることもエレベー

ターを使うこともできず、今日の高エネルギー社会を維持することが難しくなります。

もう一つは、地球上で循環している資源です。最も大事なものとして水がありますが、日本は水に恵まれており、気候が変化しても深刻な水不足を心配する必要はないとも言われています。毎年、水不足が心配される四国でも、水不足の日が次第に減っており、水道制限が少なくなってきたと聞きました。ところが地球全体は、そうではありません。地球全体の水の量は、地球ができて以来ほとんど変わることはないと言われていますが、問題は「淡水」の減少です。たとえばアルプス山脈では、現在、氷河がどんどん溶けており、その結果、降った雨や雪は、たちまち海に流れてしまいます。また北極海でも氷が減少し、溶けた水でクマが溺れ死んだりしているようですが、ここでも地上に降った雨の多くが、そのまま海に流れ込んでいます。つまり、地球全体の水量は変わらなくても、使える淡水の量が事実上減っているのです。その結果として、穀物不足になります。それに加え、人口が増加していま

すから、食糧がなくなる地域が生まれています。アフリカなどでは、環境破壊で水が不足する地域が相当あるのではないかと思います。

第二に危惧される問題が、生物種の減少です。数年前に私がロシアに旅行したとき、三八度以上の気温を記録し、自然発火で山火事が起きました。ロシアでは、毎年、山火事によって森林が崩壊しており、さまざまな生物が死んでいます。森の生きものやシロクマやクジラが絶滅しても自分には関係ないと思う方もいるかもしれませんが、人間のためだけに地球があるわけではありません。また生物の多様性が失われると、自然のバランスが壊れて、人間にもはね返ってくるでしょう。

第三に危惧される問題は、自然環境が悪化し、人間の生活が持続できなくなるという点です。たとえば現在、炭酸ガスが増えており、窒息するほどではないにしても、それによって地球温暖化が進行しています。この温暖化により、太平洋にあるツバルは国ごと水没するのではないかと言われています。ツバルでは、多

No Image

加藤講師は、古今東西の思想のエッセンスを縦横に引きながら、持続可能な未来へ向かって、「内面の荒れ野」を越え、豊かな精神の沃野を開いていく必要性を語った

くの男子生徒が、船乗りになるための訓練を積んでいるという話がありました。国土がなくなっても、いつも船上にいられるというのが、皮肉にも彼らが船乗りになる理由の一つになっているそうです。また、地球の温度が三度ほど上昇するだけで、日本では今の米は作れなくなると言われており、南方で作っている米を輸入して栽培することになるかもしれません。地球上で最も暑い地域では、耕作ができなくなるかもしれません。

また、土壌からたくさんの鉛が出ています。現在は、危険とされる量の二十分の一程度ですが、釣り人が鉛の入ったおもりを川に捨てたり、鉛を含んだはんだ付きの家電製品を人々が捨てたりするため、水中や地中に溶け込み続けているのです。その一つの対策案として、鉛のない家電製品を作るために、「鉛フリーはんだ」の採用が考えられています。しかしながら、鉛の代わりに、たとえば、すすなどの代替金属をはんだに使ったとしても、さらに危険度は増すかもしれません。やはり最善策は、家電製品を捨てずに、分

解して再利用することなのです。

現在、二〇二〇年の東京オリンピックのメダルを作るために、不要な携帯電話やパソコンを回収してメダルの材料を取り出すことが提案されています。素晴らしいですね。家電製品から金属を取り出す技術や海水に溶けている資源を集める技術が発達すれば、鉱山でわざわざ掘らなくても間に合うかもしれない。ごみを丹念に集めれば、何とかなるかもしれません（笑）。ともかく、そういう工夫を一つひとつ重ねていくことで、循環型社会に変わっていくわけです。

このように、資源、生態系システム、環境の持続可能性が脅かされているなかで、循環型社会にしていくことで持続可能性は保たれるのではないか、というのが私たちの描く見通しです。

2 さまざまなエコロジイ思想

では、どうすればそのような社会を実現できるのでしょうか。これはなかなか難しい問題です。アメリカの水産生物学者レイチェル・カーソンは、『沈黙の春』

の最初の部分で、このように書いています。

アメリカの奥深くわけ入ったところに、ある町があった。生命あるものはみな、自然と一つだった。町のまわりには、豊かな田畑が碁盤の目のようにひろがり、穀物畑の続くその先は丘がもりあがり…

（青樹築一訳、新潮文庫）

そして、あるとき鳥が鳴かなくなり、植物、昆虫、動物たちに死の影が広がっているという恐ろしい情景を描写していきます。防虫のために農薬を畑に撒くと、害虫だけでなく、それを食べる小鳥も、その他の連鎖するさまざま生物も大量に死滅する事態が起こるとして、彼女は警鐘を鳴らしました。その結果、DDTやBHCといった殺虫剤の使用は、マラリア蚊が大量に発生する地域を除いて、世界的に禁止する方向に向かったわけです。このようにして、生命を救うための対策がとられてきたわけですが、そもそも生物が死ぬと何が危険なのでしょう。

食物連鎖——どの生物も何かを食べ、何かに食べられるという連鎖の網の目に組み込まれていますね。ところが、人間はどうでしょう。食べるだけです。人間は連鎖の頂上において「何にも食われぬ」。そこで「何食わぬ」顔をしているわけです（笑）。しかし、そんな顔をしているばかりではすみません。他の生物にとつて危険な環境は、人間にとつても危険なのです。氷がなくなつたせいで、獲物を捕まえられなくなつたホツキョクグマが疲れて溺れ死ぬように、他の生物種がなくなることで人類も危険にさらされるのです。

人間には「生物を好む」本性が

また、人間は、食物、エネルギー、衣料、医薬品などに自然物を用いています。さらに、街に自然豊かな公園を造つて快適な環境を保つなど、生態系に依存しています。生物学者のE・O・ウィルソンは、人間の感性は生物、あるいは生命システムを好むように遺伝的に形成されているという、感性の充足について書きました（『バイオフィリア』ちくま学芸文庫）。「学校で木を

植えよう」「都市には自然公園が必要だ」というのも、生物多様性を守ろうとする人間の生得的な傾向からかもしれません。私たちは生物学的にただ生きるためだけでなく、幸福を感じて生きるためにも、生物種の保存が必要になるわけです。

「万物一体」「草木国土悉皆成仏」

江戸前期の学者、熊沢蕃山は、朱子学の「万物一体」や仏教の「草木国土悉皆成仏」すなわち草木も国土も皆仏に成るといふ教えについて質問され、このように答えます。

万物一体とは、天地万物みな太虚の一気より生じたものなるゆへに、仁者は、一草一木をも、其時なく其理なくてはきらず候。況や飛潜動走のものをや。

（『集義和書』、岩波書店・日本思想体系30『熊沢蕃山』所収）

かみくだいて言えば、「万物は皆、もとは同じ材料（気）からでき上がっているのだから、情愛心のある人は時

季にもかなわず、理由もないのに、木を伐ったり、草を抜いたりはしない。いわんや飛潜動走のもの（鳥獣虫魚）の命を大事にするのは当然だ」ということです。さらに、こう言います。

草木にても、つよき日でりなどに、しほむを見ては、我心もしほるゝごとし。雨露のめぐみを得て青やかにさかへぬるを見ては、我心もよろこばし。是一体のしるしなり。（同）

草木がしおれば、自分の心もしおれたように感じ、草木が生き生きとしていれば、自分の心もうれしい。これが万物一体の証拠だということです。儒教のなかの朱子学をよく勉強していた彼は、宇宙全体がひとつの「氣」からできていることを知っていれば、自然を愛する気持ちをもつことができる、と考えていました。一般的に、日本人が自然を愛するのは仏教が理由だと言われますが。ちなみに蕃山は、さかんに仏教を悪く言うていたのですが、「草木国土悉皆成仏」についてはそ

れほど悪く思っていなかったと思います。蕃山でしたらきつと「儒教や朱子学にも、自然を愛する気持ちを育てる力がある」と言ったでしょう。

「自然を守れ」は神の命令

カトリックでは、二〇一五年にフランシスコ教皇によつて「ラウダート・シ」という回勅が発表されました（日本語訳は「回勅 ラウダート・シ」ともに暮らす家を大切に」カトリック中央協議会）。中世のアッシジの聖フランシスコには、小鳥に説教をしたという有名な伝説があります。富豪の跡継ぎだった彼は、自分の財産を貧しい人々に渡し、清貧の修道会をつくって、多くの人々に影響を与えました。教皇はこの聖人を慕って、「フランシスコ」という名前にしたそうです。教皇はこの回勅のなかで、「エコロジカルな回心」という言葉を使っています。「回心」とは、これまでの生き方を反省して、正しい生き方に心を開くという意味です。「エコロジカルな回心」には、自然を守るために、気持ちをすっきり改め、新しい気持ちで取り組んでいこうと

という願いが込められています。教皇は回勅で「内的な意味での荒れ野があまりにも広大であるがゆえに、外的な意味での世の荒れ野が広がっています」(217項)と述べています。いま世の中に「内面の荒れ野」が目に見えるかたちで広がってしまっていると。

そして、こう続けます。

生態学的危機は、心からの回心への召喚状でもあります。…それ(注||エコロジカルな回心)は、イエス・キリストとの出会いがもたらすものを周りの世界とのかかわりの中であかしさせます。神の作品の保護者たれ、との召命を生きることが、徳のある生活には欠かせないことであり、キリスト者としての経験にとつて任意の、あるいは副次的な要素ではありません。(同項)

つまり、自然を守れというのは神の命令であり、主観的な好き嫌いのような問題ではない、それはキリスト教徒としての最も欠かせない使命であるということです。

この教皇の言葉からも、自然を守ることと宗教は非常に深くつながっていると理解できます。

「灯に寄る虫もわが母」

これに関連して、平安時代の明恵上人のエピソードを紹介します。あるとき、明恵上人がいた京都・とがのお梅尾の高山寺に、北条泰時の部下が押しかけて、承久の乱の敗残兵がたくさん隠れているだろう、差し出せと命じます。それに対し明恵上人はこう言つて、断ります。

「…そもそもこのお山は三宝寄進の所にして殺生禁断の地、鷹に追われる鳥も、獵師の矢をのがれたけものも、みなここに隠れて命をつないでいます。いくさに負け落ちのびて木の根、岩の間にひそんでいる兵士を、おとがめがあるからといって追出して敵の手にわたすようなことが出来るでしょうか。飢えたる虎に身を与えた昔の人ほどの慈悲はなくとも、せて袖の内、袈裟の下になりと入れてかばいたい。今後、今後もそうするでしょうよ。それが御政道

のためにはいけないとならば、いまこの場、どうか私の首をはねてください」

(上田三四二著『死に臨む態度』春秋社)

私はこの言葉に、「大菩提心を以て本願とす」とタイトルを付けました。これは、明恵上人の『摧邪輪ざいじやりん』のなかにありますが、彼が大事にした生き方だったと思います。これが日本仏教のなかの考え方の一つです。

この明恵上人の言葉を訳した上田三四二氏は、「東洋では、人間も牛も豚も同じ命だと観じて、西欧のように人間だけを特別扱いはしない」と言います(『ゆらく 死生観』春秋社)。一方、キリスト教では、人間を他の動物と一緒にせず、特別扱いするという傾向があります。「人間偏重」をはっきりと教義のなかに抱え込んでいます。さらに上田氏は、明恵上人についてこのように述べます。

人間は死んで牛や豚や虫に生まれかわるとする輪廻転生の思想からすれば、灯に寄る虫もわが母だとす

る感傷も許されることになる。梅尾の明恵上人の博愛は人間と牛と犬と、ないしは虻はちと蜂はちとの区別がなかった。明恵は寝そべる犬の前を行くとき小腰をかがめ、佇たふむ馬に時候の挨拶をして通った。(同)

小鳥に説教した聖フランシスコですと、馬に挨拶をした明恵上人のことがわかるのかもしれませんが、「灯に寄る虫もわが母」というような輪廻を前提にした自然・生物に対する思いやりは、キリスト教文化のなかには少ないと思います。ただ、ギリシャには確かに、次のようなエピソードがあります。ある人が犬を棒で叩いていたら、そばにいた人が「やめてくれよ。俺の友だちの生まれ変わりなんだから」と言つてとめようとした。「どうして、お前の友だちだとわかるんだ」とたずねると、「鳴き声が似ているんだよ」(笑)。これは、紀元前五、六世紀ごろのピタゴラスの逸話だとされています。ピタゴラスは、転生を信じていたわけです。

このように、どの宗教にも、自然に対する愛情を支える考え方、態度、気持ちがありますが、それぞれの

教義に基づいて、違ったかたちで現れてくる側面があるわけです。

教義を超えて共感できる自然の愛し方

回勅『ラウダート・シ』では、自然のなかに「三位一体の神」を識別できると述べられています（239項）。たとえば、夕焼けの空を見ていると「美しいなあ。ここに神が顕れておられる」と感じるキリスト教徒もいるでしょう。『ラウダート・シ』には「神が全能であり創造主であることを忘れる靈性を受け入れることはできません」（75項）とあります。それを忘れてしまうと「結局わたしたちは、地上の諸力を礼拝し、あるいは神の地位を力づくで奪い、果ては、神の創造のみわがを踏みじる無制限の権利を主張するまでになるのです」（同項）。つまり、創造主を忘れることが墮落の始まりであると説きます。「自分は神によって創られたから存在するのだ」という被造物感情が、キリスト教徒の感性に埋め込まれているのでしょうか。

しかし、日本的な靈性は、これと違います。鈴木大

拙は『日本的靈性』のなかで、「鎌倉時代になって、政治と文化が貴族的・概念的因襲性を失却して、大地性となったとき、日本の靈性は自己に目覚めた」（第二篇）と書いています。貴族的・概念的因襲性、すなわち儀礼とか経文の訓詁注釈とかが中心だった平安仏教に対し、大地性すなわち人間の現実から離れず、地に足をつけて仏の教えの根本をダイレクトにつかもうとする。そのような鎌倉仏教が、親鸞、道元、日蓮などによって生まれました。鈴木大拙はそれを、「日本の靈性は自己に目覚めた」と表現したのです。このような意味での日本の靈性には、「神が全能であり、創造主である」という教えや感性は含まれていません。

しかし、日本の靈性がキリスト教の教義を認めていないから、また、カトリックが日本の靈性をわかっていないから、互いに受け入れられないと安易に言ってしまうっていいのかわか。また、キリスト教固有の教義に基づいた自然観にも、輪廻の概念に基づく仏教の生命観にも、両方共感できない人もいます。そのあたりを掘り下げ、より多くの人に開かれた宗教性・精神

性を示していくことが、いま宗教を論じる際に必要なのではないでしょうか。

各宗教には「共感する」ことが不可能な領域がありますが、一方で、固有の教義を超えた「共感可能」な部分もあります。たとえば、キリスト教文化のなかにありながらも、伝統的教義とはかなり異なる自然観が示される場合があります。十九世紀のアメリカの思想家エマソンは、このように述べています。

精神が受ける影響のなかで、時間的にも一番早く、一番重要でもあるのは、自然の影響です。日ごとに太陽、そして日没のあとは、「夜」と夜の星たち。いつも風が吹き、いつも草が茂ります。…彼（注＝学者）にとつて自然とは何でしょうか。神が織り上げるこの織布おひぬめの不可思議なつづき模様には、けっして始まりもなく、けっして終わりもなく、いつもおのれ自身に立ち帰る循環能力がそなわっています。

〔「アメリカの学者」『エマソン論文集 上』酒本雅之訳、岩波文庫所収〕

大いなる自然は永遠に巡り続けている。その大きな自然との一体性を感じるものが、人間にとつて根本的に大事なことだ、とエマソンは言いました。彼自身は、これをキリスト教の立場と一致するものとして述べていますが、しかしそこには、キリスト教を信じていない人にも受け入れられるような考えが見られると思います。

また、ドイツの文豪ゲーテ。彼が伝統的キリスト教を信じていたかどうかは議論の余地がありますが、若い時の作品である『若きウェルテルの悩み』にこう書いています。

数知れぬ蚊の群が赤い落日のなかに元気よく踊りまわり、沈む陽の最後のきらめきとともに草むらから甲虫がぶんぶん飛び立つ。このようなあたりのざわめきや動きに誘われて、ぼくは大地に注意を向ける。すると、ぼくの立っている堅い岩から水分を取っている苔や、やせた砂丘の斜面を這っている灌木が、

自然のふところ深く燃えている神聖な生命を、よく
に明らかに示して見せてくれる。

(井上正蔵訳、旺文社文庫)

自然内部の聖なる生命が自分のなかにもあると感じる
ことはあるでしょうが、苔にまで生命の聖性を見出し
たのは、ゲートル固有の感じ方かもしれません。

しかし実は、あの小林一茶も「我上に やがて咲ら
ん 苔の花」という俳句を詠んでいます。多くがミリ
単位の小さな苔の花——植物学的には「花」ではあり
ませんが——二百、三百とまとまって咲きますね。一
茶は、その小さな輝く花々が死後、私の墓石を美しく
荘厳してくれるだろうと詠んだのです。このように、
苔の花のような小さなものの美しさや尊さに着目する
ことが一茶の俳句の特徴でした。その意味で、まった
く文化圏の異なるゲートルと一茶にも共通面を見出せる
のではないのでしょうか。

「功利主義」「美的共感」「合理的予測」

自然を大事にしようという動きのなかには、さまざま
まな考えや感覚が見られます。一つ目は、人間にはエ
ネルギー、食料、医薬品などが必要であり、そのため
に持続可能性を支えていかなければならないという「功
利主義」です。二つ目は、先のゲートルや一茶に見られ
るような、生活の本質的部分とされる、自然の美しさ
への「美的共感」です。三つ目に、「合理的予測」です。
つまり、資源、環境、生物多様性などについて、科学
的なデータを的確に理解し、妥当な未来予測に基づい
て行動することが必要になってきます。合理的な根拠
の上に「自然が脅かされている」とわかれば、何らか
の手を打たなければなりません。

たとえば、先日、ある新聞で、魚の胃袋を開いて検
査したところ、顕微鏡でないと見えないくらいに小さ
なビニールのかげらがあり、そうした人工物が大量の
魚の胃袋で見つかる事態になっているとの報告があり
ました。報告では、もはやビニール袋を海に捨てない
ようにするだけでは解決にならない。ビニール袋の使

用自体を禁止するぐらいの対策をとらなければ、魚は知らないうちに得体のしれない存在と化してしまう、とありました。たんに、生きていくために自然を必要としたり、自然によって気持ちを落ち着かせ、喜びを感じたりするだけでなく、自然科学の予測に注視し、対策をとらなければなりません。

カトリックでは、神から創ってもらった自分を大事にすれば、おのずと自然も大事に思えてくる、と説いています。そして、科学と宗教の両方から自然を大事にすることが「被造物としての責任」であるとします。

わたしたちが与えてきた損傷をいやしうるエコロジ―を本気で開発するつもりなら、科学のいかなる部門も知恵のいかなる表現も除外されてはならず、それには宗教と宗教特有の言語も含まれます。

〔ラウタート・シ〕(63項)

そして、被造界での責任と、創造主と大自然に対する責任が、信仰の本質的な部分をなすと悟る人がキリス

ト者なのだと言われています。ただ、この被造という考えも、すべての人から了解されるわけではありません。せん。

教皇は、さらにこのように述べます。

人間の尊厳を守ろうと献身する人は、キリスト教信仰のうちに、そうした努力の最深の根拠を見いだすことができます。一人ひとりの生は、絶望的な混沌のただ中で、まったくの偶然あるいは際限なき循環に支配された世界の中で、あてどなくさまよっているのではない、という確かさは、なんとすばらしいものでしょう。創造主は、「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた」(エレミヤ・5)とわたしたち一人ひとりということがおできになります。(65項)

たしかに、信仰に基づいて人間の尊厳を守ることについては、キリスト教徒でなくとも賛同できるでしょう。キリスト教では、子どもは生まれる前から「人間とし

て生まれること」を期待されているため、生まれた子どもを一個の人格として大事にしようと思います。こういう気持ちなら多くの人が共有できるかもしれません。しかし、神が胎児を造る前から知っており、生まれる前から聖別するとなると、科学的にも受け入れがたくなつてきます。カトリックでは、発達のいかんを問わず、生まれる前の生命に手を加えるような医学的行為は許されませんが、そこも意見が分かれるところだと思います。

3 消費社会における宗教性

またキリスト教には、「人間は生まれながらにして罪を背負っている」「何も悪いことをしていないと自分で思っても、そうではない。罪を神に許してもらわなければならぬ」という考えがあります。

仏教的「原罪」

そのような考え方が仏教のなかに見られるのかどうか、鴨長明の『発心集』から探ってみました。こうあ

ります。「心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ」と。実なるかな、此の言。人、一期過ぐる間に、思ひと思ふわざ、悪業に非ずと云ふ事なし」(序)。つまり、人間は悪業に染まった存在であり、そういう汚れた自分の心を師匠としてはいけないという戒めです。

何に況や、因果の理を知らず、名利の謬りにしづめるをや。空しく五欲のきづなこぼりに引かれて、終に奈落の底に入りなんとす。心有らん人、誰か此の事を恐れざらんや。(同)

人間には、常に名利(名声と利益)を求める気持ちがあり、そういうものに惑わされて、悪に近づいていく。「善の心は戸外に遊ぶ鹿のようですなぎとめられない。悪の心は家の犬のようにまとわりつく」ともあります。だからこそ、「心の師」としての信仰が必要であると言います。「欲望は無限である」ことを前提に、キリスト教とは違った角度で人間の罪を見つめようとしています。

無限の欲望に翻弄される人間

この「無限の欲望」について考えてみましょう。調べてみると、貨幣経済や資本主義の進展とともに、欲望の制限ない拡大への警鐘が頻繁に出てくることばかりです。たとえば、トマス・モアの『ユートピア』に、長年おとなしいとされてきた羊が荒々しい危険な生き物になってきたとの記述があります（第一巻）。イギリスでは、土地の貴族や紳士、聖職者までもが、農民から耕作地をとりあげ、牧場として囲うようになりました。そして、それまでは肉やミルクのために飼われていた羊が、羊毛で現金を獲得し、貯金するためのものへと変わっていきます。人間がもともともっていた欲望が現金に姿を変え、人々は「無限にお金が欲しい」と思うようになったのです。

身近なところにも例はありますね。たとえば、ブランドのバッグをたくさん持っているにもかかわらず、新たなバッグを買いに行きたがる女性がいます。理由をたずねると、「隣の奥さんだって持っているから」。

そのブランドのどこがいいのか聞いてみても、「そのブランドのロゴが付いているから」（笑）。商品が本当に必要だからというよりも、広告に巧みに煽られたり、他人を羨んだりして、商品を「欲しがるように仕向けられている」人々が、この消費社会で増えているのです。こういう自己顕示的消費をもたらず働きを「ヴェブレン効果」とも言いますね。

大きな問題ではありませんが、一方、こういう社会だからこそ、多くの人々が「欲望は無限であり、永遠に満たされることはない」と自覚できるのかもしれない。ここに宗教の重要な意味があります。

もちろん、空腹のときに宗教的理由をつけて「我慢しなさい」と言われても無理ですし、一昼夜眠らないで山中を何キロと駆け巡って「修行しなさい」と言われてもできません。宗教に可能なのは、自然な欲望以外の、社会的につくられた部分をなくして、本来の自然な欲望に戻すことではないでしょうか。『ラウダー・ト・シ』には「清貧の思想」について書かれています。

聖フランシスコの貧しさと簡素さは、禁欲生活の単なる外観ではなく、はるかに徹底したものであって、現実を利用や支配の単なる客体におとしめてしまうことへの拒絶なのです。(11項)

神への信仰は、万物を畏敬の念で大切にする生活態度をもたらし、おのずから清貧となつていくと述べられています。

一方、仏教者である吉田兼好の『徒然草』には、清貧についてこう述べられています。

名利に使はれて、静かなる暇無く、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。財多ければ身を守るに貧し。害を買ひ、累つらみひを招くなかななり。…愚かなる人の、目を喜ばしむる楽しみ、また、あぢきなし。…利に惑ふは、勝れて愚かなる人なり。(第三八段)

自然な欲望以上の際限のない欲望は、自分の心を惑わし、不幸になるばかりだ、と言っています。

「出家と在家の分業」とその境界

このように東西の宗教は、欲望の抑制を説くわけですが、現実的には、在家の人々は欲望を捨てるのが難しいために、禁欲を守る出家僧侶の世話をして、その功德を在家に回してもらおうという関係が見られました。来世への不安を募らせる在家について、竹村牧男氏は『ブッデイスト・エコロジー』(ノンブル社)のなかでこう述べています。

ゆえに善根を積んで、来世には少なくともよりよい世界に生まれることを願うことになる。善根を積むには、自ら修行することもありうるが、多くの一般人はそのこともできないので、インドの伝統宗教ではバラモン僧に祈祷をお願いし、お布施をつむことが奨励される。

これは仏教も同様でした。出家と在家をある意味で分業化することで、当時は社会がうまく機能していたの

かもしれません。しかし、在家の人間の数が急増し、大量生産・大量消費の時代を迎えると、この分業体制では対応できなくなるわけです。

大量生産といえば、アメリカのフォード社が二十世紀のはじめに、T型フォードの生産で実施した方式（フォード・システム）が知られています。フォード社は、自動車の組み立ての全工程にベルトコンベアを採用し、作業工程を何千にも分けて単純化し、肌の色で差別されてきた人々や障がいをもつ人たちも作業者として雇用されます。また、ネジなどの部品を規格化し、互換性を高めていきました。こうして大量生産によって安価になった自動車は、フォード社の従業員たちはじめ多くの庶民が購入するようになります。このような生産方式が、大量生産、そして大量消費、大量廃棄の時代を本格的にスタートさせていったわけです。

マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を、この「出家と在家の関係」から読むと面白いかもしれません。つまり、修道院に暮らしていた人と同じような禁欲的な生活を俗人であ

るカルヴァン派のプロテスタントも開始し、その世俗内禁欲が資本主義をつくった、とウェーバーは主張したわけです。街の人々が毎日早起きをして勤勉な生活を送り、ぜいたくや浪費をせずにさらに貯蓄を重ねるようになったのです。また、利潤の追求を宗教的に正当化しました。

もちろん、ウェーバーの主張の可否は、いまだに議論されています。また仮に、彼の言うとおり、禁欲する精神態度が社会生活のなかで大きく広がり、それが資本主義という社会をつくったのだとしても、いまはそういう禁欲精神が崩壊してしまった感じがします。禁欲的な生き方を人々が支えられなくなり、欲望のままに生きる時代を迎えているのではないのでしょうか。実はウェーバーも、同書のなかで、宗教的な熱意で労働に励むという文化はやがて崩壊するだろうと予測していました。結論部分で彼が言った通り、私たちの社会は「精神のない専門人、心情のない享楽人」の集まりになっているわけです。

脱宗教社会で「いまを生きる」

事実、西洋世界で宗教心が薄れていると言われます。アメリカはまだ多分にキリスト教的ですが、ヨーロッパの脱キリスト教化は広く知られるところとなりまりました。

一九九〇年代後半にアメリカで発表された世論調査によると、「神やある種の普遍的な生命力の存在を信じている」人は、アメリカで九五%だったのに対し、イギリスでは六一%でした。また、「イエス・キリストは神か、神の子だと思っている」人は、アメリカで八四%だったのに対し、イギリスでは四六%でした。私がスイスの学会に出席したときも、以前と違って研究発表が日曜日に行われるようになっていました。かつては、日曜日はみな教会に行ってしまうので研究発表をしていなかったのですが、「いまヨーロッパの哲学系の先生で日曜日に教会に行く人は四%から七%ぐらいです。ほとんど教会に行きません」というのです。統計的にも、ヨーロッパでは教会に行く人の数がどんどん減少しているようです。

そうすると「死後の救済のための信仰」という見方も説得力をなくしていくと思いますが、これに関連して、日本の仏教のなかに有名な言葉があります。先の明恵上人ですが、「我は後世^{ごせ}たすからんと云者^{いふ}に非ず。たゞ現世に、先あるべきやうにてあらんと云者なり」(『梅尾明恵上人遺訓』)と述べています。自分は死んだ後の救いを願う者ではない、自分にとって問題なのは、この現世で何をしなければならぬのかということなのだ、という趣旨です。

仏教のなかにも、よき来世を願って信仰の核を組み立てていった人と、それ以上に、いまどのような気持ちで生きなければならぬかという、現在の心を清らかにすることのほうを強調した人がいました。道元禪師は、「人間が死んだ後、魂が抜け出すという説(身滅心常論)は虚偽である」と否定しながら、「現世の行為が未来に結果を及ぼす」ことは当然として、その影響の仕方を三種挙げています(『正法眼蔵』「三時業」)。仏教に限らず「来世をどうするか」という未来の問題とは別に、「いま自分がどう生きるか」という現在の問題が、

あらゆる宗教を意味づける指針となつてゐる部分があると思ひます。

ドイツの哲学者ヤスバースはこのように言つてゐます。

われわれ人間は、われわれ自身によつて決意する場面でありわれわれが自動的には自然法則に服属しない場面である自由をもちながらも、われわれ自身によつて存在するのではない。むしろわれわれは、おのれの自由において「超越的なものから」贈与されてゐるのである。

〔哲学入門〕、『哲学とは何か』林田新二訳、白水社所収

人間は人間だけで存在してゐるのではない。超越者から自分という存在を授かつたのだということです。もともと精神科医だつたヤスバースは、人間は人間本来の姿をとつたときに宗教心が顕れる、と言ひました。死後の救いをこそ求める宗教性とは大きく異なつており、「いま・ここ」の実存、生きる姿勢を重要視してゐるの

です。

十九世紀、アメリカ文化の一つの源流を生んだとされるソローは、コンコードという町に小屋を造り、自然のなかで生活をしました。アメリカで兵役拒否運動が起きたとき、兵役拒否者のポケットには必ず、ソローの書いた『ウォールデン』（邦訳は真崎義博訳『森の生活ウォールデン』など）が入つてゐたと言われてゐます。

ソローの思想は、アメリカの兵役拒否運動の思想の源流になりました。また、「戦争のために金を使うなら税金は払わない」と主張した彼は、税金不払い運動を実践しました。そして自然に対して深い共感を示し、自然のなかに「最高の現実 highest reality」（ヘンリー・ソロー 野生の学舎 今福龍太著、みすず書房）があると述べました。

あの『若草物語』を書いたルイーザ・メイ・オルコットは、実はソローの近所に住み、ソローとも親交を深めてゐました。オルコットは、「ソローさんが山に入ると森じゅうの葉っぱが全部ソローさんのことを感じ

とつていような気がする」「あらゆる自然がソローさんと響き合っているような感じがする」と書いています。ソローはそれほどまでに自然を体のすみずみで感じとれる力をもっており、そうした体験を「最高の現実」と表現したのです。

このようなものごとの根源について、たとえば空海は「自己は本来、他者の全体である」と表現しました。竹村牧男氏は、この空海による他者了解は、他の生物まで含めた「他者」を「自己」とする立場であり、自己中心主義や人間中心主義ではなく、生命中心主義の立場を促していると述べています（『ブッディスト・エコロジー』）。

ここで紹介したヤスパースやソローの思想にも、空海の思想にも、特定の教義を超えた宗教性、たとえば、「自然のなかに入ったときの喜び」や、子どもが殺されたというニュースを見たときの「喪われた命に対する悲しみ」といった、すべての人が感じるはずの宗教性があるのではないのでしょうか。

4 「情報のオーバード」に 打ち勝つ宗教

では、そもそも宗教とは何なのでしょう。フランスの社会学者デュルケムが書いた『宗教生活の原初形態』には、「宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信念と行事である」（古野清人訳、岩波文庫）とあります。彼は、原始的なシャーマニズム、トーテミズム、アニミズムなどと「宗教」とをはっきり区別していました。しかし同時に、それらは連続しているという意識もあつたと思います。こういう彼の見方は、その後の宗教社会学や宗教学に特有の傾きを与えたと考えます。

知識を、秩序立てる、機能

近年よく引用されているのが、アメリカの人類学者クリフォード・ギアツによる宗教の定義です。ギアツ

によると、ある宗教は、「(1)象徴の体系であり、(2)人間の中に強力な、広くゆきわたった、永続する情調(mood)と動機づけを打ち立てる。(3)それは、一般的な存在の秩序の概念を形成し、(4)そして、これらの概念を事実性(factuality)の層をもっておおい、(5)そのために情調と動機づけが独特な形で現実的であるようにみえる」(『文化の解釈学Ⅰ』吉田禎吾ほか訳、岩波現代選書)といえます。ここで注目したいのは、(3)の、宗教が存在の秩序の概念を形成していく機能です。つまり、たいいていの人は、新聞を読んでも、百科事典で調べても、学校で百点をとっても、宇宙と社会と人間の全体がどういう関係で成り立ち、動いているのかなどわかりません。やはり特定の宗教を信じ、それを基軸にしてはじめて、社会や自然、人間についての知識・観念が関係づけられ、秩序づけられていくのです。

世界は「インフォメーション・オーバーロード(情報過多)」の時代を迎えています。二〇二〇年までに全世界で生成されるデジタルデータの総量(デジタルユニバーズ・DU)は四十ゼタ(ゼタは、十の二十一乗)バイトを

超えると言われていました。二〇〇五年から二〇二〇年までにDUは三百倍になると予想され、二〇一二年から二年ごとに二倍のペースで増大しています。たとえば、情報をどの程度知ることができるのかという観点で、ある人と私を比べた場合、二人の距離は縮まっていくでしょうか、それとも広がっていくでしょうか。二人の距離は、放っておけば離れていくでしょう。地球上の人類が知る情報量は増え続け、その分、放っておけば個人間の距離は猛スピードで遠ざかっていくのです。

にせ情報を見抜く

では、どうすれば距離を縮めることができるのでしょうか。間違った情報を消していけばいいのです！ところが、従来は、多くの人々が自由に意見を出し合うことで、間違った情報は淘汰され、正しい情報だけが生き残るはずだと考えられてきました。言論を統制したり抑圧するのではなく、自由に意見を出せるようにすることで間違った情報は消えていくだろうと。イギ

リスのジョン・ミルトンも、「言論・出版の自由」(「アレオパジティカ」という論文でそのことについて述べています。ヨーロッパやアメリカでは、ミルトンの生きた十七世紀から今日にいたるまで、それがずっと有力な見解とされてきました。

しかし現実には、言論を自由におけば情報が淘汰され、真理が生き残るかという、そういうわけでもなく、反対に、ますます混沌としてきています。自由に見えを出せるようにして、情報が増大するうちに、真偽も善悪も判断がつかなくなってきたのです。非常に危険です。

ですから間違った情報を見抜いて、捨てていかねばならない。もつとも、必ずしも正確とはいえなくとも、人に希望や喜びを与える情報もあります。ですから、「間違っていて、なおかつ有害な情報」を減らす努力が求められていると思います。そのような情報はさまざまな勢いで増殖しており、なかなか手に負えないわけですが――。

「簡素で満ち足りた生活」

最後に宗教の社会的機能についてまとめておきたいと思います。禁欲の根拠づけと普及は、歴史的には在家と出家という分業構造で維持されてきました。その際、出家の極端な禁欲が、悪魔、誘惑、怨霊を調伏すると考えられてきました。ところが、社会の世俗化によって、人間が禁欲しなければならない理由や根拠が消失してしまいます。それでも、いわゆる宗教教義の型にはまらずに、宗教性の根源を内面的にとらえる人々がいました。それを、たとえばヤスパースは「超越的なもの」として、ソローは「最高の現実」として、空海は「共生」として表現したわけです。

ですから、大量生産・大量消費・大量破壊に対して節度を保ち、「簡素でありながら深い充足感のある生活」の魅力を伝えることが、宗教の社会的機能のなかで、今、とくに必要なものだと思います。中野孝次氏の『清貧の思想』(草思社)という本には、貧しくても楽しく内面的に豊かに暮らそうとした人がたくさん登場します。すべての人がこの本の通りに生きるとは難しい

でしょうが、私たちの地球の持続可能性が脅かされているのは、多くの人間が過剰に資源を搾取したり、自然を荒らしたりしているからです。「内面の荒れ野」が外部に広がっているわけです。それに対して、何らかの精神性を拡大することで、あらゆる人間に「簡素で満ち足りた生活」の素晴らしさを伝え、持続可能な未来を支えていくことができるかもしれません。

そして、ギアツが言った「一般的な存在の秩序の概念を形成」という宗教の機能は、現代のこの「情報のオーバーロード」に打ち勝つ可能性をもっています。非常に困難であると思いますが、宗教による安心立命や宗教的な安らぎによって、ものごとの実相がはつきり見え、真実がシンプルに心にしみ込んでいくはずです。そのようにして現代のこの混沌とした状況を収束させていくことこそが、宗教の社会的使命なのだと思います。

質疑応答

【質問者】 情報がオーバーロードしている状況で、これらの情報の混乱を克服していくために、具体的にどう対応していけばよいのでしょうか。

【講師】 情報がオーバーロードして、手をつけられないほどひどい状況になっていることすら、たいいていのは気づいていません。一方、あふれる情報を利用しようとする人たちもいます。たとえば、服飾産業は、売れ行きデータを大量に集めて、翌年は何色の服を作れば売り上げが伸びるのかを分析します。ビッグデータを使って予測するのです。また、鉄道会社の人は、ICカード乗車券や切符の情報から、使用日付や乗車区間の記録をたどることができるかもしれません。そこから、乗客がどう流れているのか、またどこで滞っているのかがわかります。このようにしてビッグデータを利用しようとする人たちは、この膨大なデータのなかから必要な情報を圧縮し、抽出するという手段を講じて、世の中の動きを捉えようとしています。

しかし私たちは、日常生活を送るなかで、本当に正しくて必要な情報かどうか見分けがつきません。私たちはやはり、信頼できる情報が何かをなるべく早く知りたいわけです。デパートに行つて紫色の洋服を何となく買つてから、実は意図的な情報に踊らされていたと気づくようでは遅いですし、前もつて信頼できる情報を知りたいですね。

そのためには専門家の役割が重要です。研究者や哲学者は、なるべく少ない情報で、人々の拠り所が明らかになるよう努力しなければなりません。自分が苦労して集めた情報を、多くの人が短時間で理解できるように圧縮する作業を専門家が心がけるべきです。しかし、なかには、話を聞けば聞くほど、ますますわからなくなる悪い専門家もいます(笑)。難しいことを言つて人を混乱させるのではなく、一人の人間が多くの情報を正しく理解して、人々が大きな間違いを犯さないように、ビッグデータを圧縮する必要があります。すべての学者やジャーナリストが心がけるべきことです。

最近ますます、無意味なことを誇張して、人目を

引きつけるような質の悪い情報が広がっています。ですから私たちは質の良い情報を作る努力をしなければなりませんし、とくに私のような学者はその責任が大いにあると思っています。また、学者でなくても、質の良い情報を選ぶ訓練をしなければなりません。

最善の方法は、やはり「信用できる人」が発信している情報を選択することだと思っています。最終的に情報に正しいかどうかは、なかなか確認できませんから、その人を信頼できるかどうか市井の人々にとつては拠り所になります。

その意味で、皆さんは、「あの人の言うことだったら耳を傾けよう」と思われるほど、友人・知人から信用されておられるでしょうか。「信頼される人間になる」「信頼できる人を見抜く」。私も含めて、この一点に、「情報過多の時代」に迷子にならないための要諦があるのではないかと思います。

(かとう ひさたけ／京都大学名誉教授)